

団に対するブラッシング指導が導入されるようになる。しかし、これが一つの形をととのえるのは1920年代に入ってからである。

この頃歯ブラシについての論議が盛んになり、いわゆるタフト型が定着するのはこの頃からである。

1920年代は学校歯科を中心にして口腔衛生普及行動が展開されたので、ブラッシング指導は大きなその柱となった。

1930年代後半からの富国強兵の政策に沿った普及活動の中では一つの位置を占めるようになる。

1945年以後では、また新しい展開となった。

1960年頃から指導の対象として幼児が入ってきた。そしてこれが大きな流れとなり、1970年代に入ってブラッシングについて歯周疾患への関心がつよまってきて、一つの大きな転換がきた。

これらの流れについて実証的に追及したい。

36) 日本海軍歯科医科士官の歴史 (IV)

大正時代に於ける創設への動向

The History of the Dental Officers in the Japanese Navy (IV)

The Event leading to the Establishment of the Organization of the Dental Officers in the Taisho Period

山崎 智
(東京都世田谷区)

歯科軍医の設置は歯科界多年の宿願であった。日露戦争に於て陸・海軍共、奏任官待遇の嘱託が生まれたが、日露戦争終了後陸軍は嘱託制は廃止され、海軍はそのまま存続した。

日本は日露戦争以後国際的に台頭したが、歯科軍医に関しては第一次世界大戦で欧米諸国が急速に設置の方向に向したのにも拘らず日本では殆ど進捗を見なかった。

その後軍縮となり軍医も削減され、歯科軍医の実現の可能性は遠のいたことは前回の学会総会並びに今回の事前抄録に報告した通りである。

第一次世界大戦中に於ける米国の歯科軍医の活躍は目覚しく、米国より出征した歯科軍医数は1,873名の多きに達し、助手、技工士も又2,000名

以上も加わったといわれている。この問題に就ては大正5年歯科新報第9巻第12号に塩田広重氏が、大正13年日本之歯界第5巻8第号に川上為次郎氏が詳しく述べている。

大正7年(1918年)歯界時報第1巻第6号に歯科軍医設置問題に就て興味ある特集記事が掲載されている。陸軍軍医学校歯科担当教官の三等軍医正岡島格氏はこの中で、歯科軍医制度を実施すると之に要する器械器具人員の経費の問題や待遇等制度の新設は甚だ困難で、寧ろ軍医に歯科教育を行った方が適策であると述べている。

この様にして陸軍では各部隊の隊付軍医が簡単な治療を施し、その他はすべて軍部外治療を行っていたが、大正8年(1919年)5月、陸普1970号で衛戍病院に再び歯科医の嘱託を採用することになり、その通達、採用規則が公布された。衛戍病院は1~4等に区別され歯科医は1・2等の内地病院及び竜山、羅南、台北、旅順、遼陽の各衛戍病院に一名宛で、治療範囲は保存治療、抜歯、公傷患者の補綴、軍医と協同作業による顎副木及び顎骨補綴となっている。歯科医の手当は50~70円であった。軍隊内における嘱託の待遇、権限等が軍医に比して低いことは昨年の本学会で報告した。

大正11年(1922年)日本之歯界第4巻第4号に楽水氏が海軍歯科軍医と題し、米国歯科軍医の世界大戦中における活躍を例に挙げて、海軍歯科軍医の設置を人道上の立場より要望しているが、その語調は平和時の為か余り強くない感がある。同じく大正11年、東洋歯科月報第2巻第4号に、余が見たる軍隊の口腔衛生と題し森口糸平氏が自分の軍隊生活の体験から兵卒が歯科の受診をうける事が困難な様子を述べている。

日本連合歯科医師会は大正8年(1919年)血脇守之助氏が会長に就任し、口腔衛生思想の普及促進、学校歯科医の設置、歯科軍医の設置の問題に力を注ぎ、大正10年及び13年に歯科軍医設置方建議書を陸海軍大臣宛提出した。その内容は米国歯科軍医の第一次世界大戦における活躍を例に、欧米諸国は挙って歯科軍医制を定めているのでわが国でも早急に歯科軍医を設置するよう建議した

大正時代「海軍軍医会雑誌」に報告されている 歯科関係発表

大正

3年	11月	舞鶴	上顎齲腫瘍患者供覧	桑原賢鏡
4年	1月	舞鶴	再び右上顎齲腫瘍患者供覧	桑原賢鏡
	9月	佐世保	唾石の一例並に標本供覧	武田正寿
	9月	佐世保	放線状菌症の一治験	林 舜
6年	11月	東京	口角に発生せる梅毒性偏平丘疹患者供覧	林 舜
7年	1月	鎮海	応急歯科治療 附、口腔衛生上の注意	高橋哲夫囑託
	2月	東京	ヴァンサン氏口炎について	今沢正冬医少監
	4月	東京	顎嚢腫に就て	今沢正冬医少監
10年	11月	呉	下顎骨々折の歯科的副木に就て	三村勝隆囑託
11年	4月	呉	ルードウィヒアンギーナーの1症例	上田医少佐
	5月	呉	歯科用副木の一例に就て	三村歯科囑託
	6月	舞鶴	歯列矯正の一例	北村歯科囑託
	9月	舞鶴	濾胞性歯牙嚢腫の一例	黒岩医大佐
	9月	呉	「マルフォームドツース」の一例	三村歯科囑託
	11月	呉	大正十一年度徴兵の歯科疾患の統計的観察	三村歯科囑託
				橋本歯科囑託
12年	1月	呉	南洋土人の歯牙に就て	関矢嘉衛医大尉
	1月	馬公	結核性口蓋潰瘍	竹稚進平医大尉
13年	12月	東京	右上顎齲に発生せる肉腫状歯齦腫の一例	工藤貞雄医少佐
14年	4月	横須賀	埋没智歯の一例	久崎金治医中尉
	6月	佐世保	「アクチノミコーゼ」の一例	梶塚隆策医少佐

が、これに対し当局は、その必要を認めるが行政財政の整理、軍縮の関係で施設の新設に困難を感じずる。現今衛戍病院が囑託歯科医を任命しつつあるのは歯科軍医設置の前提であると言明した。

海軍軍医会雑誌に大正年間に掲載された海軍各地研究会における歯科関係の発表は表に示した20題に過ぎず、この中で 歯科囑託 の発表が目につく。これに比して陸軍の軍医団雑誌には各地研究会における歯科関係の発表は大正2～4年の3年間だけでも58題も報告され、これは全部軍医によるもので、主に歯科器の使用法、齲蝕の処置法、口内炎、智歯難生、歯槽膿漏、顎骨々折で、陸海軍の行き方に差があるのが感ぜられる。

又当時の海軍囑託歯科医の氏名の調査が非常に困難で、判明したものだけを表示した。定員は横須賀、呉、佐世保病院に各2名、湊、舞鶴病院並に練習艦隊、連合艦隊に各1名であった。

大正時代海軍囑託歯科医氏名

(大正6年)

高橋 哲夫
桑野 春彦
三宅 寛平
市原 辰実

練習艦隊 (浅間)
練習艦隊
練習艦隊
欧州戦

(7年)

三村 勝隆
滝 賢卓
橋詰 文雄
笹野 栄
清水 幸利

呉病→3F
呉病
横病
佐病
佐病

(11年)

北村

舞病

(13年)

松本 隆

舞病

(14年)

金子 勝男
橋本伊八郎

1F (日向)
練習艦隊→呉病

(15年)

田中健之助

練習艦隊 (八雲)

軍縮の結果医官の削減を行った事は前述したが、航空兵力の増強に伴う軍医の補充に困難を生じたので、医学生軍医志願の増加を図る為、平野勇医務局長時代の大正14年(1925年)、初任軍医科士官の遠洋航海乗組、二年現役軍医科・薬剤科士官制度の創設を実施した。二年現役制度は、日本海軍の採用した成功した制度となって他科にも後に拡大された。

大正10年(1921年)陸海軍の予算の総予算に対する割合が48.1%、歯科医師数は設置運動初期の明治37年に比して8.1倍となったが、大正年代に歯科軍医は遂に誕生しなかった。

37) 出動地に於ける歯科診療

“Dental Treatment at Battlefield”

日本大学松戸歯学部 ○落合 俊輔
池田 直
出地 弘
谷津 三雄

本書の1ページに「医第31号、本書ハ陸軍軍医学校教官陸軍軍医中佐松本秀治ノ執筆セルモノニシテ出動地ニ於ケル初級軍医及歯科医ノ好参考書ト認メ印刷配賦ス、昭和15年3月29日、陸軍省医務局長、三木良英」とある。陸軍軍医学校令は明治21年発布されたが、口腔外科が設けられたのは明治39年である。初代教官は岡島格で、大正7年に第2代目の教官が三内式副木で有名な三内多喜治で、約20年在職した後日赤中央病院に移った後、第3代目は昭和12年教官になった井上日英で、数カ月後第4代目の松本秀治が教官となった。この松本秀治教官当時は支那事変から太平洋戦争に発展し、戦局は戦地から護送される顎顔面損傷患者が前後を通じて最も多かった時代でもあった。第5代目の松本正直教官で終戦となり、遂に軍医学校の口腔外科は終止符を打つことになる。この軍医学校は戦後国立東京第一病院となり、その後は入院患者の治療や手術は千葉大学の佐藤伊吉が顧問となり継続された。

なお、本書が刊行された昭和15年の秋は東京をはじめ各地で開かれた皇紀2600年記念の祭典が行

われ、歯科界においても当時の歯科教育機関が中心となり、皇紀2600年記念歯科医学会が昭和15年11月7～9日にわたり盛大に開催されたことは第13回本学術大会において報告した。当然のことながら当時陸軍軍医学校口腔外科においても松本秀治が中心となり、記念集会が戦傷による顎口腔外傷外科が主題でとりあげられている。本書は9×12.5cm大の小冊子で戦陣の携帯の便に作られ全88ページである。緒言に「戦地特ニ戦闘行動終了セル時急ニ多発スル歯痛ノ如キハ多ク出動前既ニ存在セル齲歯ノ治療セラレズンテ放置セラレアリシモノガ環境ノ急変、飲食物ノ変化、肉体的過労、睡眠不足等ノ為病症急進シテ歯痛ヲ誘発スルニ至ルニ因ル平時ニ於ケル口腔衛生思想普及シ齲歯ヲ絶滅シ置クニ於テハ此等歯痛ノ大部分ハ避け得ラルベシ……戦地ニ於テ惹起セル歯痛ハ戦力ニ影響スル所大ナリ之ガ完全ナル治療ハ戦力増進上看過スベカラザルモノナリ、本冊子ハ出動地ニ於ケル口腔疾患並ニ顎損傷ノ診療ニ関スル方針並ニ其限度ヲ示シ更ニ歯科診療指針ニ於テ具体的治療方法ヲ揚ゲ以テ實際診療ノ任ニ当リアル初級軍医及歯科医諸士ノ参考ニ資セントス」からその意図を知ることができる。目次はないが、本書は第1編、診療方針、1. 第一戦部隊、2. 野戦病院、3. 野戦予備病院、4. 兵站病院、5. 陸軍病院(満州及支那)、第2編、診療指針、1. 治療準備(歯牙の名称及称呼、設備、器械類、消耗品、薬物、器械、薬物、材料)2. 治療(手技、齲蝕及其ノ継発症、歯槽膿漏、口内炎、智歯難生症、外傷、食餌、歯科常用剤処方)からなっていて、通覧するに今日の急患の処置に十分間に合うような内容となっている。

なお、昭和15年は中野操著、日本医事大年表によると4月陸軍は今事変の実際に鑑み新たに歯科医将校制度を設け少将まで進級の道を開く、6月30日、皇紀2600年慶祝の為め来朝中の満州国皇帝、陸軍軍医学校並に東京第一陸軍病院を参観し入院中の傷病勇士を慰問すなどの医事がみられる。